

# 談話標識「まあ」について

富 横 純 一 \*

キーワード：「まあ」、談話標識、心的操作、処理過程、曖昧性

## 要　旨

談話標識「まあ」の諸用法を観察し、「まあ」の持つ本質的な機能について検討した。「まあ」が現れる現象を観察した結果、情報そのものではなく、その情報が導出される処理過程と密接な関わりがあることが認められた。さらに、「まあ」の現れる位置、および独り言で使用可能な点を考慮すると、「まあ」の本質的機能は「処理過程の曖昧性を標示する」ものと捉えることができる。

また、聞き手への働きかけを示す「まあ」については、本質的機能からの派生、「曖昧性」が及ぼす効果と説明することで、「まあ」の統一的な位置付けが可能となることを示した。

## 0. 問題の所在

日常談話において頻繁に現れる言語形式に感動詞・間投詞の類がある。近年の研究により、これらの形式がさまざまな機能を持っていることが明らかになりつつある<sup>\*1</sup>。しかし、取り上げられている形式はまだ少なく、包括的な議論もそれほど多くはない。

本稿では、このような形式の中から「まあ」<sup>\*2</sup>を取り上げ、考察を試みる。具体

\* jtogashi@lingua.tsukuba.ac.jp

\*1 田窪(1992)、田窪(1995)、定延・田窪(1995)、森山(1996)、田窪・金水(1997)等を参照。いずれも感動詞・間投詞(および応答詞)についての精緻な分析が見られる。なお、本稿では田窪(1992)、田窪(1995)を踏まえて、感動詞・間投詞・応答詞の類を「談話標識」と呼称する。この意味するところは、定延・田窪(1995)で用いられている「心的操作標識」とほぼ同じである。

\*2 本稿の用例では「ま」と記す場合もあるが、「まあ／ま」のどちらも同じ形式として扱う。なお、音調的な特徴については後述する。

的には以下のような表現で用いられる形式である。

- (1) 1980円に消費税だから、まあ、2100円くらいかな。
- (2) A 結局、どうなったんですか？  
B まあ、いろいろあります。
- (3)(ケンカをしている二人の間に割って入って)  
まあ、まあ、まあ、落ち着いて。

本稿の目的は次の二点となる。一つ目として、「まあ」のさまざまな用法を観察し、「まあ」の機能を話し手の心内の情報処理の観点から記述していくこと、二つ目として、「まあ」が表す聞き手への働きかけを本質的な機能からの派生と捉え、語用論的に扱うことが可能であること、この二点を中心に検討していく。

## 1. 先行研究

「まあ」そのものを扱った論考としては、川上(1993,1994)、加藤(1999)が挙げられる<sup>\*3</sup>。本節では、その要点を示し、さらに問題点を指摘する。

川上(1993,1994)は、実例による分析から「まあ」を、発話冒頭に現れる場合と発話中の文頭・文中に現れる場合とに分け、前者を「応答型用法」、後者を「展開型用法」と位置付けている。そして、「まあ」の基本機能を、「いろいろ問題はあるにしても、ここではひとまず大まかにひきくくって述べる」としている。聞き手に配慮してスムーズな談話展開を促すものであり、自分の発話内容を発展させる用法を持つとしている<sup>\*4</sup>。

---

\*3 これ以外に、「まあ」について言及しているものとしては、森山(1989a)、田嶋(1992)等がある。

\*4 川上(1993,1994)の概略を以下に示す。

- (a)応答型用法 … 相手の発話内容に対する受け取り方を表示しつつ、自分の発話内容を展開させていく用法。先行発話を受けつつ次への展開をスムーズに誘導する。
- (b)展開型用法 … 自分の主張・見解をいかに展開させて聞き手に伝えるかに焦点がある。そして話題の転換後にスムーズに後続内容を導入できるように促している。

「まあ」を応答と展開とに分類して扱った点は評価できると思われる。しかし、その用法として「スムーズな談話展開を促す」ことを挙げているが、「まあ」発話において常にそのような解釈が可能かどうか、という点で疑問が残る。例えば、(4)のように、

- (4) まあ、実際には、まあ、具体的な検討は、まあ、何もしていなくて……。

「まあ」を何度も用いる発話がはたしてスムーズな発話といえるだろうか。必ずしも、「まあ」に「発話内容の発展」のような機能が働いているとは言い切れないのではないか。

加藤(1999)は、川上(1993,1994)の分析を踏まえ、応答と展開の各用法をさらに場合分けし、「まあ」の内実に迫っている<sup>\*5</sup>。実例に基づいた分析から、「まあ」の基本機能を「とりあえずの反応」であるとしている。そして、「まあ」が用いられる状況に応じて、「とりあえずの反応」が自分の発話内容を発展させていく、と述べている。

文タイプ別の詳細な分類は評価できるが、川上(1993,1994)と同じく、会話分析的な視点、つまり実際のコミュニケーションにおける役割というものに注目しており、「まあ」発話による聞き手への働きかけが主たる分析となっている。基本機能として記述されている「とりあえずの反応」が話し手にとっての「とりあえず」なのか、聞き手にとっての「とりあえず」なのかが規定されておらず、結果的に不明確なままとなっている。

この二つの論考に共通する問題点として、以下の二点が指摘できよう。

- (5)a. 実例の分析によっているため、会話という観点からの検討のみになってしまっている。そのため、「聞き手に対する配慮」といった機能が導出されるが、後述するように、「まあ」が独り言で発話可能であるという事実を考慮していない。

---

\*5 加藤(1999)は川上(1993,1994)における応答型用法を、質問文への応答・要求文への応答・平叙文への応答に分類し、それぞれの場合において「まあ」にニュアンスの違いが認められるとしている。また同じく、展開型用法を、導入・補足説明・間つなぎ・結論という四種に分類し、それぞれの環境において「まあ」が現れるとしている。

b. (3)で挙げたような「まあ」の例を、「大まかにひきくくって述べる」や「とりあえずの反応」で説明することができない。結局、「まあ」が用いられる状況の場合分けに留まり、「まあ」の本質的な機能の追求に至っていない。実際に「まあ」が常に「スムーズな展開」を担っているのか、「とりあえずの反応」がそれとどう結びついているのか、という点に関しては疑問の余地がある。

そこで本稿では、上記の問題点を踏まえつつ、「まあ」の持つ本質的な機能について検討していく。「まあ」の用いられるさまざまな例を検討し、話し手の心内における情報処理の観点から、「まあ」の分析を試みる。

## 2. 現象の観察

本節では具体的な用例の検討を行い、「まあ」に見られる性質を分析する。

### 2.1. 「まあ」が使用可能となる条件

「まあ」はどのような発話にも現れるわけではない。次の二例を比較されたい。

(6) 1980円に消費税だから、まあ、2100円くらいかな。 (= (1))

(7) ??1980円に消費税だから、まあ、2079円だな。

「1980円+消費税」の計算結果が曖昧な場合は「まあ」が現れることができるが((6))、正確な計算結果が出ている場合は現れることができない((7))。これは数値の計算に限ったものではなく、何らかの処理(考え方)の結果、正確な情報が出力されたという状況の場合は、「まあ」は現れることがない。

(8) A フレミングの左手の法則は何と何と何？

B 運動と磁力と電気。

(9) A フレミングの左手の法則は何と何と何？

B ??まあ、運動と磁力と電気。

(10) (Bが太郎のことをよく知っている場合)

A 太郎って、今何してるの？

B あいつは大学生やってるよ。

(11) ((10)と同じ状況で)

- A 太郎って、今何してるの？  
 B ??あいつは、まあ、大学生やってるよ。

消費税の計算のような複雑な(あるいは面倒な)計算だけではなく、(10)(11)のような、よく知っている情報の処理においても、「まあ」の可否は同様である<sup>\*6</sup>。したがって、「まあ」発話は計算処理<sup>\*7</sup>そのものの複雑さに起因するものではないことが分かる。計算処理の結果(「まあ」の後に現れる情報)が曖昧であれば、「まあ」が許容されるといえる<sup>\*8</sup>。

しかし必ずしも、「まあ」の後に現れる情報が曖昧性を帯びているとは限らない。

(12) A 仕事、手伝ってくれる？

- B ま、いいよ。

(13) ……で最終的にはこうなるわけです。まあ、これが結論ですね。

(14) (Bは太郎のことをよく知らない場合)

- A 太郎って何してるの？  
 B まあ、元気でやってるよ。

(12)～(14)における「まあ」発話はいずれも自然である。そしてさらに、これらの発話には、(12)では「しぶしぶ応じる」態度、(13)では「これが結論であるとは明確には断言できない」という態度、(14)では「よく知らないけど、たぶん元気なのだろう」というはっきりとしない予測、といったニュアンスが含まれている<sup>\*9</sup>。

\*6 これらの例は、何らかの特定の文脈を与えることで許容度が上昇する。話し手の含意(本当に言いたいこと)を解釈しようとすると、許容されてしまう。これに関しては4節で述べる。

\*7 話し手の心内で行われるさまざまなデータの処理をここでは「計算処理」と呼ぶ。具体的な数値の計算のみを表すのではない点に注意されたい。

\*8 「まあ」が「とりあえず」「一応」「だいたい」等と共に現れやすい点も証左となる。

- (c) まあ、とりあえず、やってみます。  
 (d) まあ、一応、完成ということで。  
 (e) まあ、だいたい、一人500円ぐらいでお願いします。

\*9 (14)では、「たぶん」等を付け加えたほうがより許容度が上がる。ただ、「たぶん」を付けた場合は、計算結果の曖昧性を示すことになる。

- (f) まあ、たぶん、元気でやってるよ。

つまり、明確に「いい」や「結論」や「元気だ」という情報を示してはおらず、そこに何らかの曖昧性が認められるのである。

この点を踏まえると、「まあ」は計算処理の結果ではなく、計算処理の過程(前提)の曖昧性が関わっていると考えることができる。もちろん、計算処理の過程が曖昧であれば処理の結果も(高確率で)曖昧となるので、特に結果の曖昧性だけが否定されるわけではない。

## 2.2. 「まあ」の出現位置

次に、「まあ」が発話のどの位置に現れることができるのかを見てみる。

(15) A Cさんと密会したという噂は本当ですか？

B1 まあ、いいじゃないですか、そんなことは。

B2 いいじゃないですか、まあ、そんなことは。

B3??いいじゃないですか、そんなことは、まあ。

(15)に見るとおり、「まあ」は発話末には現れることができない。それ以外の位置には、ある程度の意味の切れ目であれば、自由に現れることができる。これは川上(1993, 1994)の指摘するとおりである。

(16) 話の続きを、まあ、今度会ったときにでも。

(17)??:話の続きを、今度会ったときにでも、まあ。

(18) まあ、明日までには完成させますよ。

(19)??:明日までには完成させますよ、まあ。

逆に言えば、「まあ」で終わる発話には、その後に発話が続くことが想定される。これは「まあ」の音調が平板あるいはやや上昇調であることからも分かる。

(20) 昨日はサッカー観戦に行ってきました。まあ。……。

実際にこのような発話があれば、聞き手は「まあ」の後に話が続くことを期待する。続かなければ、「で？」や「何？」と聞き返すことが可能である。その点からも、「まあ」が発話末に現れることができず、「まあ」の後には何らかの発話が必要

となることが分かる<sup>\*10</sup>。

この制約は、心内の情報処理の観点から見た場合、非常に示唆的である。「まあ」が発話末に位置しないということは、計算処理の結果の提示の後には現れることができないということである。つまり、「まあ」は何らかの計算処理の途中であることを示すといえる。(20)のように、後に発話が続かない場合でも、その解釈は「情報がまだ出力されていない」となる。出力前であるにも関わらず、「まあ」が発話可能であるということは、計算処理の結果とは(直接的には)結びついていないと考えることができる。

また、「まあ」の位置によって計算処理過程の想定が異なってくる。例えば、

(21) A 締切過ぎてるんだけど。

B1 まあ、明日までには完成させますよ。

B2 明日までには、まあ、完成させますよ。

このB1とB2は解釈に若干の違いがあると思われる。B1は「締切が過ぎている」ことへの対応そのものの計算が曖昧である。そして結果として提示された「明日までに完成させる」ことも曖昧な意味合いを含んでいる。一方、B2は「明日までになんとかする」という意味合いであり、その計算過程は「明日どうするか」から始まっているといえる。「明日のこと」自体は明確な前提ではあるが、「どうするか」という計算が曖昧であるため、「完成させること」のみに曖昧な意味合いが生じる。

したがって、計算結果の曖昧性は計算処理過程の曖昧性から発生すると捉えることができ、「まあ」が直接関わっているのは計算処理過程であると位置付けることができる。

### 2.3. 独り言による「まあ」発話

最後に「まあ」の独り言<sup>\*11</sup>での使用を見てみる。

---

\*10 相手をなだめるような「まあ」(本文の(3))は、後に何も現れない発話が可能である。このような「まあ」については4節で扱う。

\*11 独り言は聞き手を想定しない音声発話として規定する。本稿での独り言の各例はすべて音声を伴ったものとして内省判断を行っている。ただし、「聞き手」がどういう概念であるかという点は、熟慮すべき課題である。

- (22)(仕事の山を前にして独り言で) まあ、なんとかなるかな。
- (23)(終わった仕事を見て独り言で) ひとまず、ま、終わりっと。
- (24)(乗り損ねたバスを見送りながら) ま、いいか。

これらは独り言での「まあ」発話であるが、ごく自然な発話である。ほとんどの談話標識に当てはまることがあるが、独り言で発話可能であるという点を積極的に指摘している論考は多くない<sup>\*12</sup>。

しかし、独り言での発話に問題がない点は、談話標識の本質的な機能を検討する上で重要である。2.1節と2.2節で導出した「処理過程の曖昧性」というファクターが「聞き手に対して向かう」ものではないことになるからである。川上(1993,1994)や加藤(1999)で示された「聞き手への配慮」「とりあえずの反応」といった「まあ」の基本的な位置付けに疑問が生じるのである。

もちろん、独り言での使用を特殊、例外的な事例として片付けることもできると思われる。が、本稿では逆に独り言での使用を考慮することで、「まあ」の統一的な機能記述が可能になるものと捉える。つまり、「まあ」の本質に聞き手へ向かうような要素を入れるべきではないのである。

独り言の場合も、「曖昧性」のファクターが制約として働いている。

- (25)(テストの結果を見て)??まあ、100点か。
- (26)(テストの結果を見て) まあ、こんなもんか。

(25)は、「テストが100点である」ことが明確な事実であり、当然それに関する処理も曖昧になりようがない。結果、「まあ」の後に現れる「100点」という情報には、(計算処理過程も含めて)曖昧性を認めることができない。したがって、「まあ」を用いることができないのである。

逆に(26)の「こんなもんか」は、テスト結果の予想が「だいたいこの範囲である」という前提から計算処理が始まっていると考えられるので、そこに曖昧性を認めることができる。「おおよそ予想からははずれていらない」という結果としての「こんなもん」発話であるので、「まあ」を用いることができる。

2.節では、「計算処理過程」と「曖昧性」という二つの要因が「まあ」に関与し

---

\*12 定延・田窪(1995)、森山(1996)、富樫(2001)等で独り言に関する指摘がある。

ていることが明らかになった。次節ではこの分析をもとに「まあ」の本質的な機能について考察していく。

### 3. 「まあ」の本質的な機能

2.節で分析した、談話標識「まあ」の特徴は次の二点である。

- (27) 「まあ」と心内での計算処理過程とが関わりを持つ
- (28) 「まあ」が「曖昧性」を示す

この特徴に基づき、「まあ」の本質的な機能を記述してみる。(29)を見られたい。

- (29) (仕事を手伝ってもらおうとする場面)

A これ、やってくれる?  
B ま、いいけど。

Bの発話は、仕事を手伝うことに対するそれほどはっきりとした自分の意志を持っていないと解釈される。つまり、「仕事を手伝うことを了承する」ことに対する何らかの強力な裏付けがないのである。ただ単に漠然とした結論としての「仕事を手伝うことへの了承」があるのみで、それを支える前提がない。そのことを「まあ」によって示していると考えられる。この文脈においての「まあ」発話の解釈はこのようになる。

これを話し手の心内における情報の処理の視点から捉え直してみる。

(29)における話し手Bの計算処理の結果は「(仕事を手伝っても)いい」である。仮にこの結果を q とすると、話し手の心内において q に至る計算処理過程が明確になっていないことが分かる。例えば、「私はこの仕事を手伝いたい」という前提があるとする。仮にこの前提を p とした場合、 $p \Rightarrow q$  というかなり明確な計算処理過程を形成することができる。このような(話し手内部の)状況を想定すると、(29)において「まあ」を用いることは困難になる。

ここから導出できるのは、「まあ」の本質的な機能は「計算処理過程の曖昧性を標示する」というものである。ここでの「曖昧性」とは「(前提を含めた)計算処理が100%確実に行われているものではない」と捉えてもらいたい。

別の例で検証してみる。

- (30) 1980円に消費税だから、まあ、2100円くらいかな。 (= (1))
- (31) ま、今日は帰ります。
- (32) まあ、やってみたら？
- (33) (乗り損ねたバスを見送りながら) ま、いいか。 (= (24))

(30)はまさに「計算処理過程の曖昧性」を表している。ちゃんとした計算ができず、正確な答えを導き出していないことを「まあ」が示している。

(31)(32)も同様である。「帰ること」「やってみたらいい」という計算結果に至る道筋が話し手の中で明確になっていないことを示している。計算結果を導き出した処理過程が曖昧であることを「まあ」が示すのである。また、前提そのもの( $p \Rightarrow q$  の「 $p$ 」の部分)が明確ではない可能性も考えられる。例えば(32)の場合、「よく分からぬけれど、やってみたら？」という解釈も可能である。これは  $p$  が曖昧であるため、計算処理過程も曖昧になるのである。

ただし、いずれの例についても言えることであるが、「まあ」と結びついているのは処理過程であり、処理の結果が曖昧かどうかには関わらない点に注意されたい。処理の結果が曖昧であるのは、処理過程の曖昧性に起因しているからにほかならない。(33)では、「(バスに乗り損ねたことが)いいか悪いか曖昧で分からない」ではなく、「いい」という結論に至った処理過程が曖昧で分からない(明確ではない・根拠が薄い)」のであり、それを「まあ」で標示しているのである。

以上から、談話標識「まあ」の本質的な機能を次のように記述することができる。

- (34) 「まあ」の機能：ある前提から結果へと至る計算処理過程が曖昧であることを示す。あるいは計算に至る際の前提そのものが明確ではないことを示す

「まあ」の本質は「心内での情報処理の行われ方」を標示するものである。したがって、聞き手への働きかけは、「まあ」の本質ではないことになる。聞き手への働きかけという側面は語用論的な派生により初めて現れると考える。次節では、この側面について考察する。

#### 4. 「まあ」発話の解釈と効果

本節では「まあ」の持つ聞き手への働きかけを語用論的に捉える。「聞き手」と

いう要素を機能記述に新たに盛り込むことなく、「まあ」を統一的に扱うことのできる可能性を示す。

#### 4.1. 相手に対しての働きかけを示す「まあ」

先行研究では指摘されていないが、聞き手への働きかけを積極的に表す「まあ」が観察できる。これは特徴的な振る舞いをする<sup>\*13</sup>。

(35) まあ、落ち着いて。

(36)(ケンカをしている二人の間に割って入って)

まあ、まあ、まあ、落ち着いて。 (=3))

(37)(ケンカをしている二人の間に割って入って)

まあ、まあ、まあ。

(38)(独り言で) \*まあ、まあ、まあ。

これらの「まあ」発話には「相手をなだめる」効果がある。相手の否定的・消極的な態度に対して、それを「なだめる」「和らげる」「やんわりと否定する」といった反応を表す。

(39) A いや、このような立派なものは受け取れません。

B まあ、まあ、まあ、そんなこと言わずに。

このような「まあ」は聞き手の存在しない状況では使用できない((38))。さらに、この類の「まあ」は単独使用(他の要素が付加しない)が可能である。

(35)～(39)が特徴的である点は、「曖昧性」を示す標識として用いにくいことからも指摘できる。

(40) ??まあ、まあ、まあ、責任は現場にあったわけでして……。

---

\*13 特に注目すべきは音調的な特徴である。この場合の「まあ」は前節まで扱ってきた「まあ」とは異なり、基本的に下降イントネーションとなる。また、「まあ、まあ、まあ」のように繰り返し形の場合には、下降イントネーションを保持しつつも、「高い山から低い山へ」あるいは「低い山から高い山へ」のような韻律のパターンを持つ。このような韻律パターンの分析については定延(2000b)を参照。

(41) ??責任は、まあ、まあ、まあ、現場にあったわけでして……。

(40)(41)に見るように、繰り返しの形が非常に不自然である。つまり、3.節で示した「まあ」の本質的機能だけでは、「まあ、まあ、まあ」のような聞き手へ働きかける表現は説明できないのである。

また、単独発話の「まあ」は繰り返し形が基本パターンとなり、一回のみの生起は非常に不自然である。(42)のように、「まあ」一回の発話では、「ケンカの当事者たち」をなだめる効果は非常に薄いと思われる。

(42) (ケンカをしている二人の間に割って入って)

#まあ。／まあ、まあ。／まあ、まあ、まあ。

しかし、次のように、単独かつ一回の発話で聞き手への働きかけを表す「まあ」もある。

(43) A やればできるじゃん。

B まあね。

(44) A これって食えるの？

B まあね。

これらの場合、「まあ」が下降イントネーションで、「ね」が高く発音されれば、曖昧性を帯びた返事((44)で言えば、本当に食べられるかどうかよく分からない)として解釈されるが、「まあ」が平板(もしくはやや上昇調)で、「ね」がその高さを維持した音調であれば、相手に対して自慢げな態度を表していると解釈される。((43)なら、「その通り。こんなにうまくできた」という態度を表す。)

何故、このようなさまざまな効果(ニュアンス)が生じるのか。本稿では、語用論的なアプローチを提案し、この類の「まあ」を本質的機能からの派生として位置付けることが可能であることを示す。

#### 4.2. 解釈と意図的な使用

「まあ」発話の背景には、情報の処理過程が存在している。その処理過程の存在を示すのが心的操縦標識の本質的な機能であると3.節で述べた。しかし、4.1.節で見たように、心的操縦の標示が表立って確認できない、聞き手への働きかけのみが

認められる発話がある。

この場合、何からの処理過程とのつながりを積極的に見出すのではなく、逆に「まあ」と処理過程とのつながりはないと仮定する。そこにあるのは、「まあ」発話と、それを聞き手がどう解釈するのかとの結びつきであると考える。

(45) (ケンカをしている二人の間に割って入って)

まあ、まあ、まあ。 (= (37))

(46) A いや、このような立派なものは受け取れません。

B まあ、まあ、まあ、そんなこと言わずに。 (= (39))

(45) や (46) の「まあ」発話は聞き手の感情を和らげる効果を持つ。これは「まあ」が本質的に持つ「曖昧性」標示の機能から、聞き手が解釈するものである。「曖昧性」はそのまま、「曖昧な物言い」につながり、そこから「はっきりと表現しない=やわらかな物言い」と派生していくものと捉えられる。それを聞き手に解釈させようという意図を持って、話し手が「まあ」を用いると考えると、このような聞き手へ働きかける「まあ」を適切に位置付けることができるのである。

また、次の発話を見てみる。

(47) (B が太郎のことをよく知っている場合)

A 太郎って、今何してるの？

B ??あいつは、まあ、大学生やってるよ。 (= (11))

これは通常はかなり不自然な発話であるが、例えば、B が「太郎は既に大学を辞めている」ことを知っているが、あまり他の人に話したくない、といった状況では、かなり許容度が上がると思われる。

(48) (B は太郎が既に大学を辞めたことを知っている場合)

A 太郎って、今何してるの？

B あいつは、まあ、大学生やってるよ。

何か情報を隠す、あるいははっきりとは言いたくない場合に、「まあ」を用いることができる。このような「まあ」発話は、聞き手にとっては、話し手が何らかの含みを持たせているような印象を与える。(48)で言えば、B は何かを隠しているので

はないか(太郎は本当は大学生ではない、等)というニュアンスが「まあ」発話によって生じる。つまり、「大学生である」という情報に対して、「まあ」によって「曖昧性」を与えているのである。

「まあ」の本質的機能である「処理の曖昧性の標示」を聞き手に解釈させることで、コミュニケーションの場におけるさまざまな効果を得る(聞き手に与える)ことができるのである。このような、聞き手への効果を発現させる談話標識の用法を、語用論的フィードバックによる派生として捉える<sup>\*14</sup>。

つまり、話し手の心内において実際に計算処理をしているかいないかに関わらず、「まあ」を発話することで、逆に聞き手に対して計算処理の「曖昧性」を解釈させようとする行動といえる。そしてそれはコミュニケーションにおいては聞き手に対して、「和らげ」や「根拠のある物言いではない」といった語用論的な効果(態度)を示すことになるのである。

(49)(ケンカをしている二人の間に割って入って)

A1 落ち着いて。

A2 まあ、落ち着いて。

(49)のような状況では、「落ち着いたほうがよい」という結論は自然に導出されるものである。ここで「まあ」を用いることができるのは、「まあ」の持つ「処理の曖昧性の標示」ではなく、「まあ」発話から派生する効果に注目しているからである。したがって、単にA1のように「落ち着いて」と発話するよりも、「和らげ」の効果が強く生じるのである。

また、自慢げな態度を表す場合の「まあね」「まあな」も、「曖昧性の標示」とは異なる、別の効果であるといえる<sup>\*15</sup>。

\*14 詳細は富樫(2001)を参照されたい。なお、語用論的フィードバックの概念は定延・田窪(1995)の「態度の表出」によるところが大きい。以下にその箇所を引用する。

(g) 「…話し手は、「ええと」や「あの(ー)」を使いながら、実際に演算領域確保や言語叢集をおこなっているとは必ずしも限らない。話し手がおこなっているのは、あくまでそうした態度の「表出」にすぎないからである」

(定延・田窪(1995), p.87)

\*15 この場合、「ね」「な」が必須となる。この理由については今後の課題である。

(50) A やればできるじゃん。

B まあね。／まあな。

この場合、「やればできる」という発話に対して、「まさにその通り」というかなり強い意思表示の態度として解釈させる。これは、明確な計算処理を、曖昧性を示すはずの「まあ」を用いることで、逆に強調させる効果を示しているといえる<sup>\*16</sup>。

まとめると、「まあ」の語用論的フィードバックによる効果は次のようになる。

(51)a. 「まあ」が表す処理の曖昧性から生じる「和らげ」の効果が、(実際の計算処理とは関係なく)聞き手に対して示される

b. 実際には明確な計算処理をしているにもかかわらず、「まあ」発話によって、その明確性を隠すことができる(結果として何らかの「含み」を持った発話になる)

「まあ」の聞き手に対する働きを、語用論的フィードバックからの派生として位置付けることで、本質的機能との関係を保持したまま、「まあ」の用法を説明することができるのである。

## 5. おわりに

本稿では、「まあ」の本質を心内の情報処理という観点に求めた。これはより厳密な談話標識の機能を見るためには、「聞き手への働きかけ」を派生的なものとして切り離す必要があるからである。そして、「聞き手への働きかけ」の側面は、語用論的フィードバックという形で、二次的なものとして「まあ」に付与されるとし、本質的機能と語用論的効果の関係性を示した。

今後の課題としては、「まあ」の音調的な側面、あるいはコーパス分析からの、より詳細な分析・検討が必要であると思われる。

---

\*16 女性的な驚き表現として用いられる「まあ(あら、まあ)」も、これらと同様に語用論的フィードバックからの派生として捉えられると思われる。「驚き」はいわゆる新規情報の獲得であるから、そこに「まあ」が現れるのは、獲得情報に対する何らかの「曖昧性」、つまり「はっきりとした事実として受け止めない」といったような反応が派生的に生じているためと考えることができる。

## 参考文献

- Chafe, Wallace L.(1994) Discourse, Consciousness, and Time. The University of Chicago Press.
- Clark, Herbert H. and Catharine R. Marshall(1981) Definite reference and mutual knowledge. *Elements of discourse understanding*, eds. by A. Joshi, B. L. Webber and I. A. Sag, Cambridge University Press.
- 加藤豊二(1999) 「談話標識『まあ』についての一考察」『日本語学・日本語教育論集』6  
名古屋学院大学留学生別科
- 川上恭子(1993) 「談話における『まあ』の用法と機能(1) 一応答型用法の分類一」『園田国文』14
- 川上恭子(1994) 「談話における『まあ』の用法と機能(2) 一展開型用法の分類一」『園田国文』15
- 金水敏(1992) 「談話管理理論からみた「だろう」」『神戸大学文学部紀要』19
- 金水敏・田窪行則(1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展3』  
日本認知科学会編：講談社サイエンティフィク
- 金水敏・田窪行則(1998) 「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」『音声による人間と機械の対話』堂下・新美・白井・田中・溝口編：オーム社
- 森山卓郎(1989a) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1 大阪大学文学部  
日本学科(言語系)
- 森山卓郎(1989b) 「コミュニケーションにおける聞き手情報 一聞き手情報配慮非配慮の理論一」『日本語のモダリティ』仁田・益岡編：くろしお出版
- 森山卓郎(1996) 「情動的感動詞考」『語文』65 大阪大学国語国文学会
- 定延利之(2000a) 『認知言語論』大修館書店
- 定延利之(2000b) 「韻律バタンが発話音調に反映されるかどうかは何が決めるか？：  
準備的考察」CREST 意味構造グループ研究報告(<http://ccs.cla.kobe-u.ac.jp/Gengo/ja/link/CREST/jpn/substance/sadanobu/index.htm>)
- 定延利之・田窪行則(1995) 「談話における心的操作モニター機構 一心的操作標識「え  
えと」「あのー」—」『言語研究』No.108
- Schiffrin, Debora(1987) Discourse Markers. Cambridge University Press.
- 杉藤美代子(1988) 「談話におけるポーズとイントネーション」『講座日本語と日本語  
教育 第2巻』杉藤美代子編：明治書院
- 田窪行則(1992) 「談話管理の標識について」『文化言語学 一その提言と建設』文化言  
語学編集委員会編：三省堂
- 田窪行則(1995) 「音声対話の言語学的モデル 一談話管理標識としての感動詞」『情  
報処理』Vol.36, No.11

- 田窪行則・金水敏(1996) 「複数の心的領域における談話管理」『認知科学』Vol.3, No.3  
田窪行則・金水敏(1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編：くろしお出版  
Takubo Yukinori and Satoshi, Kinsui(1997) Discourse management in terms of mental spaces. *Journal of pragmatics*, 28  
土屋菜穂子(1997) 「感動詞の分類 一対話コーパスを資料として一」平成9年度国語学会春季大会発表要旨  
富樫純一(2001) 「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6 筑波大学文芸・言語研究科

附記 本稿は平成12年度筑波大学国語国文学会での研究発表に大幅な加筆・修正を施したものである。有益なコメントを下さった諸先生方にこの場を借りて感謝を申し上げたい。

とがし じゅんいち／文芸・言語研究科  
(2002年6月27日 受理)